間違った正教徒か？土着信仰の正統な継承者か？
――クリャシェンにおける祈願儀礼と自己認識――

櫻間　瑛

現代社会において、民族と宗教は人々を分類する基本的なカテゴリーとしての役割を担っている。と同時に、この両者は非常に密接に関連したものとして捉えられている。しかし、そうした両者の関係の想定は、しばしば混乱をきたし、かつ民族／宗教それぞれのカテゴリーの内実自体も、非常に曖昧な性質を帯びている。ソ連崩壊以降、その領内では民族復興／宗教復興が盛り上がったが、同時にその運動の中でも、各々の民族／宗教のあり方についての多様な様相が露見している。

本報告で取り上げたクリャシェン (kriasheny) という人々は、そうした多様性が強く顕在化した人々といえる。クリャシェンとは、しばしば受洗タタール (kreshchenye tatary) とも呼ばれ、ロシアにおけるムスリムを代表する民族とされているタタールの中の、ロシア正教を伝統的に信仰してきたグループとみなされている。革命前後には、独立した民族という扱いを受けていたが、30 年代を迎える頃にはタタールの中の 1 グループとして扱われるようになった。その後、ペレストロイカを迎えると、クリャシェンの間でも自らの文化・伝統に対する関心が高まると同時に、独立した民族としての地位を回復することを求める運動が活発化するようになった。

同時に、彼らは正教やイスラームが到来する前の、土着の信仰に由来する習慣などを保持している集団ともされ、民俗学的な研究の対象ともなってきた。そうした習慣の中でも、特に注目を集めるものの一つが、キレメチ (Kirəmət) と呼ばれる精霊に対する祈願儀礼である。帝政期の宣教師の記述を見ると、初夏に雨や豊作を祈って、このキレメチが宿るとされる木や泉で人々が家畜を屠り、粥を炊いて祈祷するという習慣が多く報告されている。この習慣には、祈祷の文句にロシア正教やイスラームの経典からの引用がみられるなど、宗教的な混交現象が起きていたことも指摘されている。同時に、当時推進されていた正教啓蒙教育の結果、すでに多くの人々がこうした儀礼に参加しなくなっている、ということも強調されている。もっとも、これらは完全に根絶されたわけではなく、革命以降も村々で引き続き行われていった。

クリャシェンが居住するいくつかの村では、こうした儀礼は現在でも存続している。願掛けのために木に括りつけられる布は、その数を減らすことはなく、毎年の豊作祈願のための粥を炊く行事も欠かさず行われ続けている。さらに村で新たに作られた沐浴場には、司祭が禁止しているにも関わらず、昔からの水に願掛けをする習慣にのっとり、硬貨を供える人が後を絶たない。

民俗学者たちは、これを古来の民族文化の残滓と位置付けている。特にクリャシェン出自の学者らは、これを自分たちが伝統的に独自の文化を有してきた集団であることの根拠として好んで言及し、積極的にこれらを復興していくことを支援している。

一方､実際に村に居住している人々からは「それは異教の習慣で自分たちは関係ない」「そういうことをしているのは、おばあさんや子供だけだ」と否定的な感想も聞かれる。村の司祭などは、これをロシア正教の道から外れた迷信として、教会に通うことに専念するよう呼びかけている。

しかし、当事者らにとって、この儀礼は彼らにとっての正教の一部とされている。これらの儀礼を行う際に、傍らには常にロシア正教にちなむイコンが置かれ、読まれる祈祷の内容も、正教の聖典から引用したものである。彼らにとっては、こうした儀礼を行うことは、神(Alla) とのつながりを確認するものとなっている。同時に、これらの実践は、自らの先祖が代々それを行ってきた伝統という重みを持っている。それにより、教会が正統なものとして喧伝する教えには反しつつも、実際にその中に生きる人々にとっては、リアルな宗教の実践として認識されている。

こうした視線の多様性は、人々の宗教／民族それ自体と双方の関係の曖昧さを反映している。宗教に対する抑圧が解かれ、ロシア正教会の権威も復活する中で、人々は自らの宗教的な所属をより意識するようになった。その中で、クリャシェンとされる人々も自らの位置付けを再確認することを試みている。自らを正教徒とし、司祭を始めとする教会の権威を信じる人々は、その教えに従い異教の旧習と映るものを批判的に眺めている。しかし、実際にその儀礼を行っている人々にとっては、これは彼らなりの正教の実践である。と同時に何よりも父祖から継承した伝統であって、自分たちの生活の不可欠な部分とみなしている。他方、クリャシェンという民族の復興を目指す学者らは、宗教的な議論には強い関心を示さず、むしろこれを民族文化の一部と解釈し、自分たちが独自の文化を有していることの証としている。

このように、教会の教えや民俗学などの学知、これまでの日常の経験などを基に、人々は宗教や民族といったものについて、各々の解釈をほどこし、自らの位置づけと態度を示している。

（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）